

伊藤秀樹著

『高等専修学校における適応と進路 —後期中等教育のセーフティネット』

(東信堂、2017年)

飯田浩之

中学校を終えた子どもたちの進学先といえば高等学校、しかも、全日制。中学校卒業者の92%が全日制の高等学校に進学するとなれば、それが「当たり前」となって不思議はない。ひと度、それが「当たり前」になると、それ以外の進学先についてはいわば「例外」とされてしまい、そこには目が向かない。加えて、もし、そこに様々な進学先があったとしても、「その他」で一括りにされてしまってその実相にまで目が届かない。

だが、間違いなく、「例外」で「その他」とされる進学先に進学する生徒たちがいる。数パーセントではあれ、そうした学校・教育施設で学ぶ者たちがいる。本書において著者が目を止めるのは、「当たり前」とされている全日制高等学校の陰に隠れるように存在している「例外」で「その他」とされる学校・教育施設とそこで学ぶ生徒たちである。そして著者は、こうした学校・教育施設が「例外」であったり「その他」であったりしながら、実は重要な役割を果たしていることを明らかにする。また、そこではその重要な役割を果たすべく特徴ある教育が展開されていることを指摘する。更に、そこに所在する特有の困難についても詳らかにする。

では、その役割、そして特徴ある教育とそこに所在する困難とは何か。

本書は、大きく2つの部分に分けられる。本書において取り上げられる「例外」で「その他」の学校・教育施設とは、定時制高校・通信制高校・高等専修学校・サポート校などであり、著者はこれを「非主流の後期中等教育機関」と呼ぶ。本書の前半部は、「非主流の後期中等教育機関」の全体を取り上げ、その実際を概観しつつ、後半部で扱う事例の位置づけを明確化した部分である。後半部

は、「非主流の後期中等教育機関」のうちから「高等専修学校」Y校を取り上げ、そこをフィールドとした調査の結果をもとに、生徒の学校適応・進路形成とそれ支える教育実践を、実践に伴われる困難と共に明らかにした部分である。

本書の中心は、何といたっても後半部である。前半部において著者は、「非主流の後期中等教育機関」の「セーフティネット」としての役割を指摘する。「非主流の後期中等教育機関」は幅広く様々な生徒を受け入れ、中学卒業後も彼／彼女らが学び続ける機会を提供している。後期中等教育段階の修了が社会で生きていくうえで最低限の資格になりつつある今、この点でこうした教育機関は、最低限の資格を得る機会となっているというのである。そして、後半部は、このような前提に立ってなされた首都圏に位置する私立の「高等専修学校」Y校の事例研究である。分析の中心は、一言で言ってしまうと、Y校がセーフティネットの役割を果たし得ているとしたら何故であるのか、そこに、なお、課題があるとしたら、それはどのような課題なのか、という点である。

この点を明らかにするために、著者は幾つかの問いを立てている。第一は、不登校経験をもつ生徒がなぜY校に登校し続けることができているのか、なお、課題があるとしたらそれは何かである。そこで明らかにされるのは、生徒の対人関係である。生徒間、生徒－教師間の対人関係に支えられていればこそ、彼／彼女らは不登校経験を乗り越え、Y校に通い続けることができているというのである。では、そうした対人関係はどのようにして形作られているのか。著者の目は、更にY校の内側に向けられる。対人関係形成の背景として著者がY校に見出したのは、生徒たちが過去の学校経験の痛みを共有していること、Y校には自閉症の生徒がいて、生徒たちはその生徒と〈バディ〉となることで支え－支えられる関係を経験していること、教師と生徒の関係が密になるような働きかけがなされていること、教師が生徒間の関係を上手にコーディネートしていることである。こうした背景のもと、ある意味、恵まれた対人関係のなかで学校に通い続けた生徒たちも、いずれは卒業して実社会や次の学校段階に進むこととなる。実社会や次の学校段階の対人関係は、Y校で培われている対人関係とは異なっている。果たして、彼／彼女らが、それに馴染むことができるのか。Y校と実社会とのギャップから早期離職・退学へと追い込まれていくことになりはしないか。著者の目は、生徒たちが直面するであろう課題——それ

は取りも直さず、Y校の課題でもあるのだが——にも向けられる。

Y校がセーフティネットとしての役割を果たし得ているのは、そこで独特の教師の指導が行われ、それを生徒が受容しているからでもある。著者が次に問うのは、生徒による教師の指導の受容についてである。この点についても著者の目は、Y校というフィールドとそこで教え・学ぶ生徒と教師に深く注がれる。その際、鍵となっているのが生徒の「志向性」である。「志向性」とは、著者によれば「何らかの目標を達成したいと個人が思い描く願望」であるのだが、Y校に学ぶ生徒たちは、地位達成・学業達成に集約されない幅広い「成長志向」を持っているという。また、手厚い指導のなかに教師の指導の意を汲み取り、教師から承認されることを望む「被承認志向」を持っているという。更に先輩をロールモデルとしてそのようになりたいとする「年長役割志向」を持っているという。これらの「志向性」を持つことによって生徒は、教師の彼ら／彼女らを巻き込むような指導を受け入れているというのである。もちろん、教師の指導はすべての生徒に受容されているわけではない。生徒や保護者が上記のような生徒の「志向性」を踏まえたY校の指導を拒否して、結果的に退学に至るケースもあるという。また、教師の指導を全面的に受容してしまい、教師の指導を相対化することができなくなってしまう場合もあるという。Y校のセーフティネットとしての役割は、この点でも課題含みであるというのが著者の見解であり、本書ではY校の実践を一方的に礼賛することなく、そこに所在する「課題」も素直に示されている。

セーフティネットというからには、進路決定と卒業のメカニズムとそれを支える教育実践も問われるべき問いである。著者の次なる問いはこの点に関する問いであり、その解明の鍵は「やりたいこと」の発見である。Y校では学校の内外の出来事が生徒の「やりたいこと」に結びつけられていた。また、「やりたいこと」が「楽しいことを仕事に」という志向性、誰かをサポートすることをしようという志向性、年長者をなぞって進路を決めていこうという志向性、自分を成長させるという志向性と結びつけられていた。著者によれば、Y校で生徒が自身の進路を決め、卒業していく鍵はそこにある。Y校の教育実践は、特別活動や部活動、専門コースの授業などを通じて上記のメカニズムに通ずる機会を創出することに力点が置かれていた。同時に、「やりたいこと」をしよ

うということが安易にフリーター志向となってしまうようにコントロールされていた。このことによって、Y校はそこに通う生徒にとってセーフティネット足り得ているというのである。ただ、この点においても著者は慎重である。生徒たちのなかには、家庭の経済的事情や、Y校のような学校に対する求人への偏りなどによる制約を強く受けて、望む進路に進めない生徒も存在する。折角、形づくることのできた進路に対する展望も、卒業後、そのまま持ち続けられるとは限らない。この点で、セーフティネットの役割も課題含みである、というのが著者の見解である。

著者のY校へのアプローチは、更にその卒業生たちにも及んでいる。卒業生たちが就業・就学を続けることができているかについて、言い換えればY校が本当にセーフティネットとしての役割を果たすことができているかにも目を向けている。卒業生に対するインタビューから、著者は、就業・就学を続けることができている生徒の場合、Y校で聞いた教師の話やそこで培った友人との心理的つながりなど、「想起される学校経験」がその支えになっていること聞き取っている。そうした学校経験を生み出したものに、Y校における「辞めないための指導」「つながり続ける教師＝卒業生関係」があることを見取っている。もちろん、この点に関しても、著者の視点は複眼的である。現実には「想起される学校経験」では乗り越えられない困難があったり、「辞めないための指導」がいったん離職・中退した場合には、その社会的自立を阻むことになったりすることの指摘も忘れない。

以上のように本書において著者は、主として「高等専修学校」A校の事例をもとに「非主流の後期中等教育機関」が生徒たちにとってセーフティネットとなるかどうか、その可能性と課題を探っている。結論は、ひと言で言ってしまうと、可能性もあれば課題もあるということになるが、大事なものは、その内実である。可能性が何によって開かれているかであり、更にその可能性そのものが課題を生み出しているという現実である。

本書で取り上げられている教育機関は、学校数・生徒数が限られているがゆえに「例外」で「その他」として位置づけられるのみで、これまでほとんど研究の俎上に載せられて来なかった教育機関である。「マイナー」にして「非主流」の教育機関が取り上げられているのであるが、そこで得られた知見とその意味

は決して小さくない。本書で取り上げられている生徒の学校適応と進路形成の問題は、「主流」とされている学校、特に課題集中校と呼ばれる学校にも広がる根深い問題であり、ここで得られた知見は「非主流」の教育機関を超えて学術的にも実践的にも適用可能な知見となっている。丹念なフィールドワークでもって捉えられた学校適応・進路形成のメカニズムや因果連関の様は、「非主流」の教育機関に限らず後期中等教育段階の教育機関のそれを捉える有効な視点を提供してくれている。「マイナー」にして「非主流」であるところから得られた知見であるがゆえに、逆に事の本質に迫るものとなっている。

もちろん、本書については、取り上げられている事例が高等専修学校A校1校であり、得られた知見がどこまで一般化できるか、疑問がないわけではない。A校の教育が比較的成功的しているのは何故かなど、事例研究としての限界が感じられたりもする。高等専修学校が取り上げられているにもかかわらず、職業教育・専門教育への目配りが薄いという印象も抱かざるを得ない。しかし、譬えていえば、事の本質は必ずしも打たれた網でもって掬い得た知見の共通性によって明らかになるものとは限らない。的を絞って的確に問題を撃ち抜くことで得られる本質も所在している。本書で得られた本質は、どちらかと言えば後者の本質であり、事の本質であることにはかわりはない。

最後に極めて主観的な言い方となるが、本書にはある種、爽やかな読後感がある。一方でY校のような教育機関のセーフティネットとしての可能性を探りながら、その一方で可能性が課題ともなり得ることを指摘する。言い換えれば、研究の対象である「非主流の後期中等教育機関」とそこで教育に携わる教師たちや学ぶ生徒たちを温かく受け止めつつも、冷静にその現実を捉えようとする。温か過ぎもせず冷た過ぎもせず、現実を素直に受け入れその先を考えていく。おそらくこれは著者の研究に対する構えがなせるところであろう。と同時に、フィールドワークによる事例研究という方法の成果でもあろう。現実には多層にして多層である。一筋縄ではいかない現実を専断的に切り分けるのではなく、複眼的に見てその実相を描き出す。フィールドワークによる事例研究ならばこの利点が本書では生かされている。